



👁️👁️ みどころ

連日TV報道されるウクライナ情勢の中、私たちはウクライナ東部ドネツク州の都市マリウポリにある巨大施設・アゾスターリ製鉄所の攻防戦をリアルタイムで知っている。日露戦争の二〇三高地の戦いも激戦だったが、こちらはもっとすごい。

ウクライナのヴァレンチン・ヴァシャノヴィチ監督による本作は、そんな戦争終結後1年を経た2025年の、“あの州”、“あの製鉄所”が舞台だ。生き残った主人公はPTSDを抱えながら死んだように生きていたが、さて本作はどんな物語に？

ロシアによる侵略戦争が開始した2014年を描く『リフレクション』(21年)と共に、本作は必見！

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■戦禍のウクライナの真実を伝える2作品が緊急公開！■

マルチェロ・マストロヤニとソフィア・ローレンが共演した『ひまわり』(70年)の公開からすでに50年以上が経過した今、各地でその再上映が行われているのは、2022年2月24日に始まったロシアによるウクライナ侵攻(プーチン大統領の言葉では特別軍事作戦)がきっかけだ。本作を鑑賞した7月4日、ウクライナ東部のルガンスク州がロシア側の手に落ちたことを知った。しかし、両国の争いが長期化していくのは明白だし、ゼレンスキー大統領はその“奪還”を宣言しているから、次にロシアが制圧を目指すドンバス地域2州の残るドネツク州での攻防に注目。

私はセルゲイ・ロズニツァ監督が2018年に発表した『ドンバス』を見ていないが、ウクライナの戦禍は2022年2月24日に始まったのではなく、ウクライナにとってはクリミア半島が占領され、国内東部で親露派の反乱が始まった2014年にロシアとの戦

争は始まっていたらしい。つまり、ロシアの軍事支援を得た親露派は、ドネツク人民共和国とルガンスク人民共和国を作り、ウクライナ東部では戦闘が恒常的な出来事になっていたらしい。なるほど、なるほど・・・。

ウクライナ侵攻から4ヶ月を経過した今も、TVや新聞では連日ウクライナの攻防戦が報道されている。そんな中、戦禍のウクライナ下で撮影された『アトランティス』（19年）と『リフレクション』（21年）の2作品が緊急公開！こりゃ必見！

■□■時代設定は2025年！舞台はあの州！あの製鉄所！■□■

次に続けて観る予定の『リフレクション』の時代設定は、ロシアがウクライナに侵攻し、侵略戦争が始まった2014年。それに対して、本作の時代設定は、ロシアとの戦争終結から1年後の2025年とされている。2022年2月24日のロシアによるウクライナ侵攻を受けて、パンフレットにあるヴァレンチン・ヴァシヤノヴィチ監督のインタビューでは、「この物語の舞台は、ウクライナ東部の紛争が終結した1年後の2025年です。そのころには戦争が終わっているという希望はありますか？」の質問に対して、「残念ながら、今となっては楽観的すぎたかなと思っています。」と答えているのが興味深い、さて現実には？

連日のTV、新聞報道の中、にわか“ウクライナ博士”になった日本人も多いが、私もその一人。今ではドンバス2州を構成するルガンスク州とドネツク州の名前がすらすら出てくるし、ウクライナの首都キエフ（ウクライナ名ではキーウ）や、ウクライナ南部の港町オデッサ（ウクライナ名ではオデーサ）は昔からよく知っている。また、日露戦争では旅順攻防戦、とりわけ二〇三高地の攻防戦が有名になったが、今回のウクライナ侵攻では、ドネツク州の都市マリウポリや、ハリコフ州の州都ハリコフ等が有名になった。そして、二〇三高地の攻防戦と同じように涙を誘ったのが、多くのウクライナ兵が籠城して戦い、最後には生存者全員がロシアの捕虜になってしまった、マリウポリにあるアゾフスターリ製鉄所での攻防戦だ。同製鉄所はウクライナで最大級の製鉄・圧延会社の一つで、ソビエト連邦時代に建設された巨大施設。そこには核攻撃などを想定した地下6階の要塞が備えられているというから、すごい。Wikipediaによると、同製鉄所はいくつものシェルターやトンネルがつながっているほか、検査・診療所や園芸場、カフェ、居住空間などが完備され、最大4000人を収容できるように水や食料を備蓄、広さは11平方kmと、東京ドームおよそ235個分に相当するそうだ。

しかし、そんなリサーチをしなくとも、アゾフスターリ製鉄所での攻防戦は連日リアルタイムで報道されたから、私もよく知っている。しかして、本作が描く戦争終結1年後、2025年のアゾフスターリ製鉄所はどんな状況に？

■□■主人公は？製鉄所の今は？唯一の友人は？■□■

7月15日から公開される、戦後のレニングラードで、生と死の戦いを続ける元・女性兵士たちの物語を描いた『戦争と女の顔』（19年）は、必見！同作は、巨匠アレクサンド

ル・ソクーロフの下に学んだ、30歳を過ぎたばかりの新鋭カンテミール・バラゴフ監督が、ノーベル文学賞を受賞したスヴェトラナ・アレクシエーヴィチのデビュー作『戦争は女の顔をしていない』に衝撃を受け、この証言集を原案に戦後の女性の運命をテーマに完成させたもの。その主人公の一人は、第二次世界大戦の独ソ戦によってPTSDを抱えながら、多くの傷病軍人が收容された病院で働く看護師のイーヤだ。

それと同じように(?)、本作の主人公は製鉄所で働く元兵士のセルヒー(アンドリー・リュマルーク)。ロシアとの約10年に及ぶ戦争によって、ウクライナ東部のあらゆる都市が廃虚と化し、人が住むには適さないほど大地が汚され、何もかも荒みきっていた。そのため今、セルヒーはPTSDに苦しんでいるらしい。もちろん、近時の“なんでも説明調”の邦画のように、それが誰かの口で直接説明されるわけではないが、冒頭に登場する、唯一の友人イワン(ワシーリ・アントニャク)と射撃訓練を行っている風景を見ればそれがわかる。2人で8名の標的(板)を並べ交互に競うように撃っていたが、イワンから「俺を撃ってみろ!」と言われると、セルヒーは「ああ、そうしてやる」と、ほんとに撃ってしまったからアレ・・・?そんな異常な状況を見れば、セルヒーがPTSDに苦しんでいることは明らかだ。

そんな心の病を持つのはイワンも同じだったらしく、生きる気力を失ったイワンはある日、燃え盛る高炉に身投げしてしまったから、可哀そう。さらに、経営者からは製鉄所の閉鎖が発表されたから、さあ、セルヒーはこれからどうやって生きていくの?

■固定カメラ、長回し撮影に見る戦後の現実とは?■

近時は手持ちカメラによる移動を伴った簡易な撮影で撮られた映画も多いが、本作はそれとは正反対の固定カメラ、長回し撮影、そしてワンシーンワンカットによる撮影が徹底している。冒頭のセルヒーとイワンによる射撃訓練もそんな撮影手法だから、戦争は終わったはずなのに、なぜ2人はそんな(ムダな)ことをしているの?と考えさせられる。

そんな撮影手法に徹した本作では、もともと口数の少ないイワンのセリフが少ないのは当然。しかし、車に乗って黙々と働くセルヒーの姿を見ていると、今彼は家族と死別し、行く当てもないまま、水源が汚染された地域に水を運ぶトラックの運転手になっていることがわかる。しかし、戦後の荒廃したウクライナをトラックで走っていると、ぬかるんだ僻地で地雷除去作業に励む兵士の、「片っ端から爆破処理をしているが先は長い。少なくとも15年から20年はかかる」と話している声が聞こえるから現実は大変だ。

私は、2019年11月に沖縄旅行に行き、旧海軍司令部やガマ等の戦跡を見学し、涙した。今年2022年に、1972年の本土復帰から50周年を迎えたそんな沖縄では、“沖縄戦”の惨状が語り継がれている。それと同じように、ウクライナのアゾフスターリ製鉄所の戦いについては、早くもその“地獄ぶり”が語られ始めている。その一つが、朝日新聞が7月5日から5回連載で始めた「アゾフスターリ『地獄』で何が起きたか」だ。その第1回は、マリウポリの製鉄所、アゾフスターリの地下シェルターから自力で脱出したセ

ルギイ・ドフノさんが、「この地獄から抜け出せたら、そして、家族が全員無事だったら、私は必ずこの経験を本にする」との決意で書き綴ったものをまとめている。本作を監督したヴァレンチン・ヴァシヤノヴィチはあくまで自分の想像力で本作を監督したが、スクリーン上に見えるアゾフスターリと、今、朝日新聞が伝える現実のアゾフスターリの対比は如何に？

■□■本格的ストーリーはカティアとの出会いからスタート！■□■

終戦後の廃虚と化したウクライナ東部のまちで、無気力なままトラック運転の業務に従事しているセルヒーが、ある日、車の故障で立ち往生している女性カティア（リュドミラ・ビレカ）と出会い、ある日近くの町へ送り届けたところから、本作の本格的な（ラブ？）ストーリーが始まっていく。

カティアは「ブラック・チューリップ」という団体に所属し、無報酬で戦死者の遺体の回収を行っている女性だ。そんなカティアに対して、セルヒーが「つらい作業だ。なぜできる？」と聞くと、それに対するカティアの答えは「死者たちのためよ。肉親に別れを告げさせて、彼らの生と戦争を終わらせるの」というものだ。そんなシーンは今ドキの邦画の撮影手法では嘘っぽくなってしまいが、ヴァレンチン・ヴァシヤノヴィチ監督の徹底した固定カメラによる長回し撮影で撮ると、2人のそんな会話には説得力がある。カティアの説得力のもう一つの源泉は、彼女が大学で考古学を学んでいたためだ。その結果、スクリーン上にはそのブラック・チューリップに加入したセルヒーが、カティアとともに各地の遺体発掘現場を回るシークエンスになっていくから、なるほど、カティアの説得力は大したものだ。

もともと本作は固定カメラによる長回しの撮影手法で、各地の遺体発掘作業の姿をこれでもか、これでもかと思わせるほど丹念に（しつこく？）見せていくので、それを鑑賞し続けるにはかなりの忍耐力が必要だ。人間は死んでしまったらどうなるの？人間の遺体は単なる物質なの？そんなこんなを色々考えさせられることになるが、戦後のウクライナでは何よりもこんな遺体発掘作業が必要だということをしっかり心に刻みたい。

■□■突然のラブシーンにビックリ！その賛否は？■□■

埋められた地雷を探し当てる作業が大変なら、医師が遺体を1つずつ見分した上で、埋葬していく作業も大変、それはよくわかる。しかし、スクリーン上に映し出されるそんな姿を延々と見続ける観客も大変だ。

そんな中、少しでも安らぎになるのは、セルヒーがカティアと語り合う風景だが、「ブラック・チューリップ」での活動が次第に板についてきた（？）セルヒーの姿を見ていると、ひょっとしてカティアとの間に淡い恋物語の展開も・・・？そう思っていると。ある日、セルヒーがかつて命を救ってやった女性がお礼を言いに来てくれるので、それに注目！国際的な環境監視組織で活動しているその女性は、「復興まで途方もない歳月を要するであろうこの国を去る」と告げ、セルヒーにも海外への移住を勧めてきたが、それに対してセル

ヒーは「即答はできない」「よく考えて決心がいたら電話を」と答えていたから、これではやっぱりカティアとの恋物語の展開はなし・・・？

ところが、本作後ラストに向けては、トラックの運転席と助手席に座る中、セルヒーがカティアに対して胸の奥底にしまっていた過去を打ち明け、心の拠り所になっていた彼女に“これから”について語り始めるので、それに注目！さらに、本作はそれに続いてあつと驚くサーモグラフィを使ったラブシーン（ベッドシーン）に移行していくので、それにも注目！ちなみに、『スターリングレード』（『シネマ1』8頁）では、雑魚寝の戦士たち、見張りの兵士たちの中、毛布の中にくるまっただけの不自由極まりない主人公たちのベッドシーンに驚かされたが、本作のサーモグラフィの演出によるベッドシーンにも驚かされる。

ウクライナ戦争の長期化が避けられないと考えられている今、そんな本作をあなたはどのように評価？

2022（令和4）年7月9日記